

Aroma Research 臨時増刊 No.1, 89-93 (2001).

QOLに対するアロマセラピー効果とその可能性

Takeo Kawaguchi (川口健夫)

城西大学薬学部

障害者施設(武蔵野障害者センター内、在宅障害者デイサービス施設「ふれあい」)において、アロマセラピー施行者および被施行者と、その効果判定者を分離することで、アロマセラピー効果の評価を盲検下に行った。「ふれあい」は在宅の身体障害者が、平日に通所して利用する施設で、施設での活動は多岐にわたり、1. 創作的活動(革工芸、陶芸等)、2. 身体的活動(散歩、リハビリ等)、3. 体験的活動(料理、買物、外食)、4. 社会的活動(日帰り外出、宿泊旅行、レンタル店利用)などであるが、筆者はボランティアで2の身体的活動の一部としてアロマセラピーを導入した。エッセンシャルオイルの香りに対する適性や、家族の希望・同意などを勘案し5名(内1名は途中脱落)にアロマセラピーマッサージを施行した。

マッサージにはローマンカモミールオイル(キャリアーとしてマカデミアオイル使用)を使用し、手、足、背中 of マッサージを行った。アロマセラピーマッサージは毎月1-2回不特定日に施行するが、施行日は効果評価者(家族)には知らせず、非施行日(対照日)の結果との比較から、評価者側に生じるbiasを排除し、真の効果の有無を判定することを計画した。また被施行者の身体に付着した残存オイルから、マッサージ施行の有無を感知されることを防止する目的で、日常的に少量のオイルを衣服に塗布した。評価は家族の中の同一人物が、評価依頼日の同一時刻に行った。判定基準は評価者の主観に依存するが、同一の評価者が同条件下に継続して判定するため、マッサージ施行日と対照日の評価値を比較することが可能となった。

統計処理の結果、「自発活動性」「全般的体調」「緊張度」「興奮度」で有為差($p < 0.05$)が確認された。